

悲しい昔話

40年ほど前、私も中学生でした。当時わが家にはテレビも冷蔵庫も洗濯機も掃除機もいわゆる電化製品というものは全くありませんでした。しかし、小学校高学年あたりからボチボチそんなぜいたくな物がわが家以外の家庭に入ってきて、中学生になるころは洗濯機などは同級生の家庭の6割か7割方普及していました。

冷蔵庫や洗濯機や掃除機は何で動くかといえば電気に決まっています。しかし、当時はどういふわけかこれらの頭に“電気”をつけて電気洗濯機とか電気冷蔵庫とか言いました。ガスや灯油を動力にするものも確かに存在はしますが、家庭用のものは電気に決まっていました。それでも電気何々という呼称が一般的だったのはそれほど「電気～」という呼び方が新鮮で先進的だったのでしょう。

さて、私が中学1年生くらいのことだったと思います。当時私の中学校では体育の時間に市販の紅白帽子をかぶることが決まりでした。決まりですのでもだまじめだった私がかぶりました。月1回ぐらい家に持ち帰って母親に洗濯してもらいました。もちろん母の洗濯は手洗いです。

ある日の体育の時間、同級生のこんな会話を耳にしました。

「この紅白帽子縫い方悪いなあ！」

「おれのも縫い目やぼろぼろになってしもた」

「おれ、洗濯機にかけたら2回でぼろぼろになってしもた」



そう言えば、たしかに家に洗濯機のある子たちの紅白帽はどれも縫い目がほつれてぼろぼろになっています。しかし、私を含めた数人の手洗い組の帽子はほつれがなくシャキッとしています。

急に私はこのシャキッとした帽子がはずかしくなりました。縫い目にほつれない帽子は家に電気洗濯機がない証^{あかし}だったからです。それ以来私は紅白帽子だけは母親に洗濯を頼みませんでした。自分で縫い目がぼろぼろになるまで、いやそうなるようにていねいに手で洗いました。やればできるもんです。ちゃんと縫い目にそれらしいほころびができました。後にも先にもこれほど真剣に手洗い洗濯に専念したことはありません。そしてようやく自分も精神的に電気洗濯機家庭の仲間入りをさせてもらったという悲しい思い出があります。

人間だれしも自分をよく見せたい、あるいは場合によってはみんなと同じように見せたいとするものです。子どもならなおさらです。と言って昔の悲しい自分を弁護します。